『中国地区英語教育学会研究紀要』No.16 (1986.8.1)

異文化間コミュニケーションに関する基礎的考察
—— Misunderstanding の問題を中心にして——

大分大学　築　道　和　明

0．はじめに

本研究は近年，関心を集めている異文化間コミュニケーション[1]の問題を外国語としての英語の教授・学習の視点から考察するものである。特に，異文化理解に伴う misunderstanding に焦点を当て，いくつかの先行研究をふまえながら，その考えられる原因，重要度等を論じてゆく。

異なる言語的，文化的な背景を持つ者が意思疎通を試みれば，そこには何らかの形での衝突，誤解，偏見等が生じてくると思われる。Varonis and Gass (㉑：328) が述べている様に，最も協力的な native speaker (以下ＮＳ) と最も熱心な non-native speaker (以下ＮＮＳ) との会話においても misunderstanding は回避できないのである。この様な異文化理解の過程で生ずる misunderstanding の研究は，少なくとも英語教育の視点からは，これまで充分に行われてきたとは言い難い。その背景には， error analysis が進展する以前の error 観と同様に，misunderstanding は悪いものであって，学習者を目標言語・文化の規則，規範に従わせることによって，それは極力避けるべきものであるといった misunderstanding そのものを研究することに対する否定的な考え方が存在するからではなかろうか。

しかしながら，物理的，心理的に，益々距離の狭まっていく今日の世界を考慮すれば，異文化理解に伴う misunderstanding を研究することによって，英語教育における文化教授のあり方，教材開発，日本人学習者の英語の intelligibility 等に関して有益な示唆を得ることが可能と思われる。

1．Misunderstanding のとらえ方

1．1　定義

異文化間コミュニケーションにおいて生ずる misunderstanding とは，それでは如何なる状態をさすのであろうか[2]。この点について明確な定義を下した論は，あまりみられないが，Varonis and Gass (⑳：73) は，misunderstanding を 'non-understanding' との対比において，次の様にとらえている。

Non-understanding：*those exchanges in which there is some overt indication that understanding between participants has not been complete.*

(1) 140 S：When are you going to visit me?
　　140 J：Pardon me?

Mis-understanding：a misunderstanding which has gone *unrecognized*.

(2) Bank employee and customer, discussing NOW account
　　NNS：　OK. Another thin' please..m..do you add another service charge for theses kindes?
　　NS：　Yes, there is a twelve dollar service charge—twelve dollar membership fee per year of twelve dollars with VISA and Mastercharge.

即ち，'non-understanding' は，対話者が不明確な情報を明らかにしようとする方略 (clarifi-

cation) を包含するのに対し，misunderstanding は，対話者双方が，生じた問題に気づかない状態をさすのである。しかしながら，この二分法では，十分に説明しきれない場合も考えられる。例えば，下記の例文(3)では，ＮＮＳがＮＳの質問の意図を誤まって解釈し，ＮＳがその事実に気づいてることは明らかであり，従って，misunderstanding にはあたらない。また，ＮＳは，clarification を行わず，ＮＮＳの応答に合わせて会話を進行させているのであるから，non-understanding とも言えない。

(3) NS : Are you going to visit San Francisco? Or Las Vegas?
NNS : Yes, I went to Disneyland and Knottsberry Farm.
NS : Oh yeah? (⑥ : 136)

そこで，本研究では，この Varonis and Gass の dichotomy を参考にして，non-under-standing と misunderstanding とを次の様に定義する。

NON-UNDERSTANDING :	発話者の意図したメッセージの全て，あるいは一部が聞き手に伝わらない状態
MIS-UNDERSTANDING :	発話者の意図したメッセージと聞き手が理解した内容との間にずれが生じた状態

(4) NS : Do you think his research is monolithic ?
NS : Well, it's hard to say. (⑳ : 74) (-clarification)

この対話は，一見，何ら問題のないものに見えるが，対話者に対する後のインタビューの結果，受け答えをしたＮＳは，質問の中の 'monolithic' という語の意味が解らず，その場をどうにか繕うために，この様に答えたということが明らかになった。従って，non-understanding にも clarificationを伴うものとそうでないものの２つのタイプを考えなければならない。

一方，misunderstanding にも２つのタイプがあると言える。即ち対話者の一方が伝達されたメッセージのずれに気づく場合と，どちらも，そのずれに気づかない場合である。さらに前者は，clarification を伴う場合（例文５）と，伴わない場合（例文３）とに細分できよう。

(5) Mieko : State is uh..what what kind of state?
Maria : It is uhm
Mieko : Michigan State ?
Maria : No, the all nation. (㉑ : 329)

１．２　先行研究

前述した様に，misunderstanding 自体を研究の対象にすることに対する否定的な考え方，また，データ収集の困難さ[3]等により，misunderstanding は，これまで十分に考察されてきたとは言い難い。そこで限られた先行研究の中から，以下，２つの論文をとり上げ，考察を進める。

１．２．１　Varonis and Gass (1985)[b]

この研究では，１組のＮＳ／ＮＮＳ間の会話をもとに，対話者が会話に対するゴールを共有せず，また，そのずれに気づいていない場合に，'negotiation of meaning'（コミュニケーション場面で，不明確な情報を明らかにしょうとする方略）がどの様に行われるかが，詳細に分析されている。また，misunderstanding に対する対応の仕方を，(ｉ)その misunderstanding に気づくか否か，(ii)会話のどの時点で気づくか，(iii) misunderstanding を修復しようと試みるか否か，の３つの視点から図１に示す様に，７つのタイプに分類している。

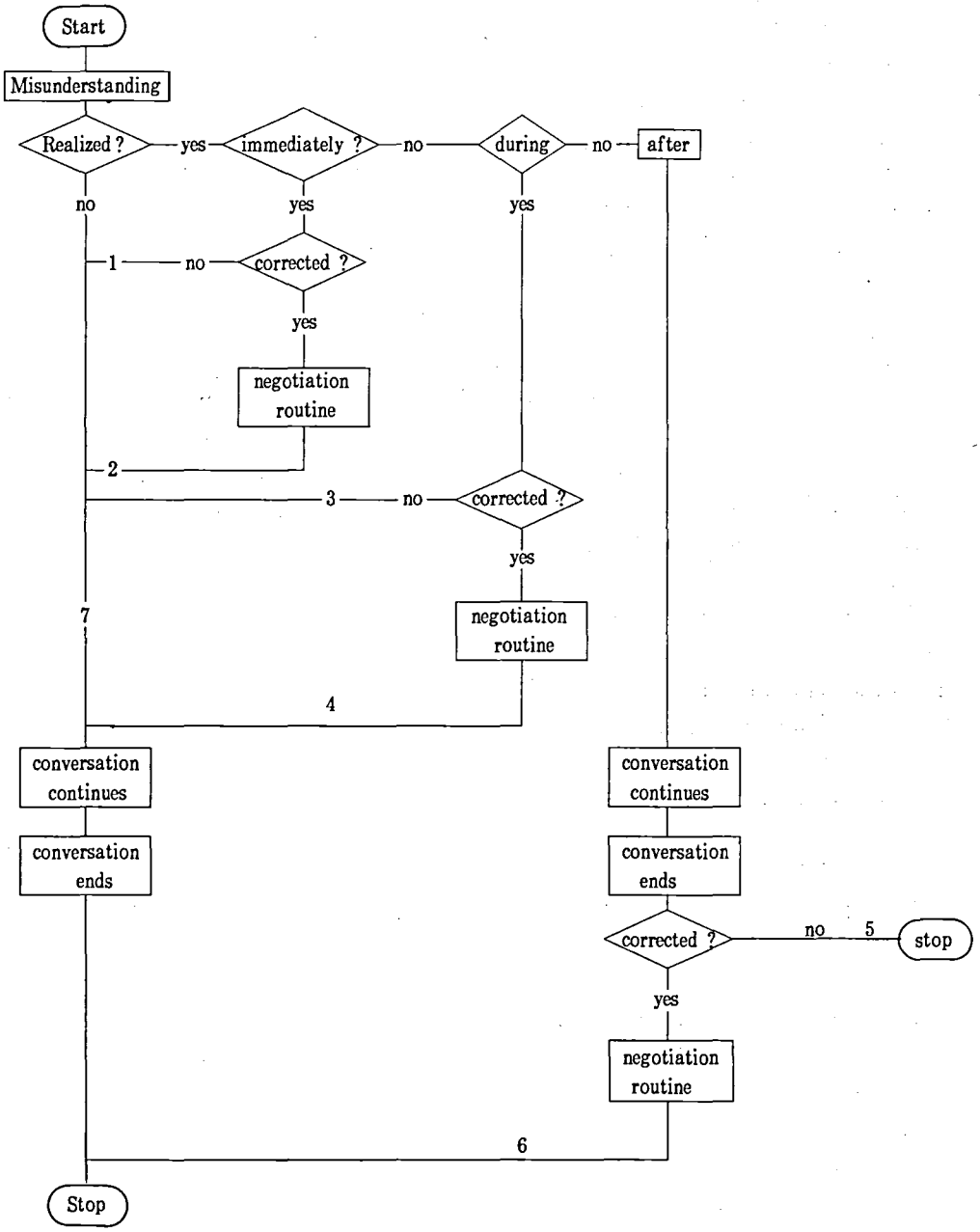

図１．Misunderstandings　(㉑：329)

即ち，

(1) 問題に気づくがそれに言及しない

(2) 問題に気づき，それに言及する

(3) 会話の後半で問題に気づくが言及しない

(4) 会話の後半で問題に気づき，言及する

(5) 会話終了後に問題に気づくが言及しない

(6) 会話終了後に問題に気づき，言及する

(7) 問題に気づかない

の7つのタイプである。

1．2．2 Thomas (1983)

Thomas は，学習者が 'pragmatic competence'（特定の目的達成のため，また，context の中で言語を理解するために，言語を効果的に用いる能力）に欠ける場合に生ずる misunderstanding を次の2つのタイプに分類している。

Pragmalinguistic failure：occurs when the pragmatic force mapped on to a linguistic token or structure is systematically different from that normally assigned to it by native speakers.

Sociopragmatic failure：cross-cultural mismatches in the assessment of social distance, of what constitutes an imposition, of when an attempt at a 'face-threatening act' should be abandoned, and in evaluating relative power, rights, and obligations, etc. (⑰：101−104)

例えば，"Can you close the window？" が，英語では，通常 request を表わすということを理解せずに "Yes I can." と応答すれば，それは，'Pragmalinguistic failure' であり，一方，どの様な質問をするのが適切かという点について NS と異なる考えをもつというのは，'Sociopragmatic failure' にかかわるのである。

2．Misunderstandingに関わる諸要因

2．1 Misunderstanding の原因

それでは，この様な misunderstanding は，何故おこるのだろうか。Thomas (1983) が論じている様に pragmatics のルールに違反することもその一因であろう。また，音韻，統語，文法等の言語体系の違いも misunderstanding を誘発する要因と考えられる。さらには，社会，文化的な背景を共有していなければ．当然のことながら，ある特定の場面での最も適切な言語・非言語行動に関して食い違いが生じてこよう。異文化間コミュニケーションにおける問題は，この様に様々な要因によって，ひきおこされると思われる。それら諸要因を体系的にまとめてみたのが図2である。

具体例を検討する前に，misunderstanding の分析と error analysis との関連について言及する必要があろう。近年の error analysis 研究では，sociolinguistics レベルでの分析も進展しており（⑪：120−121），両者に共通する側面も多いと思われる。しかし，misunderstanding の研究は，次の点において，error analysis とは異なるのである。(i)学習者の error が必ず misunderstanding につながるとは限らない。特に，linguistic レベルでは，NSが学習者の error に容易に気づくことができ，従って，何らかの形で問題を解決しようと試みるのが一般的であろう。逆に，文法的に正しい言語表現でも状況次第では，misunderstanding をひきおこす可能性も考えられる。(ii) error analysis では，学習者の中間言語と目標言語との間のずれ，換言すれば，目標言語規則からの逸脱を分析するのに対し，misunderstanding の研究では学習者の不適切な言語表現が NS に誤解される場合のみならず，NS が学習者によって misunderstood される場合もその考察の対象とするのである。

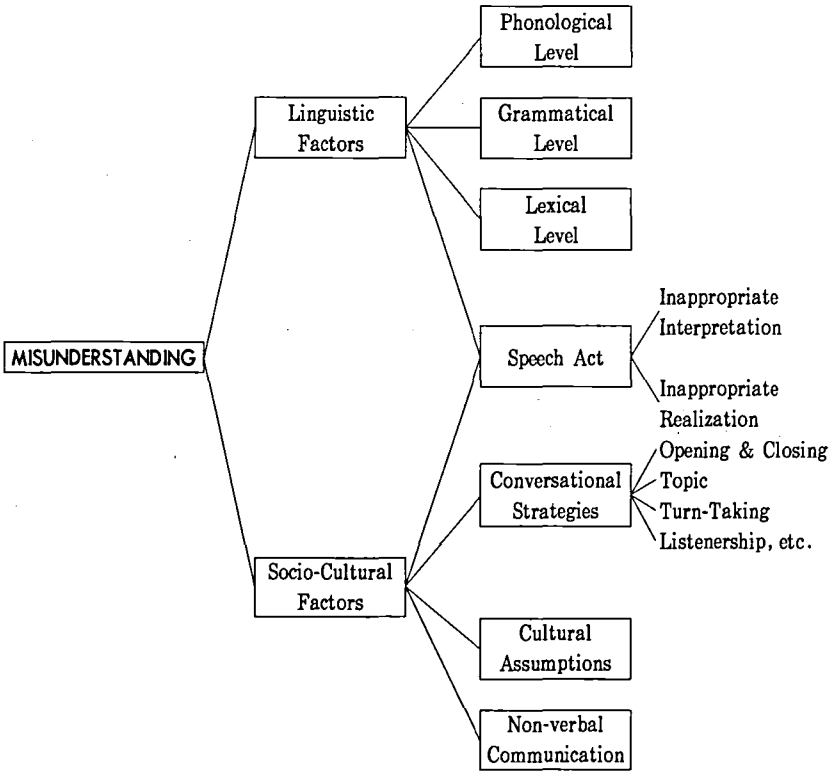

図２．Misunderstandings に関わる諸要因

２．２　Misunderstandingの具体例

２．２．１　Linguistic Level の Misunderstanding

(6) In a restaurant

Sang-Ik : Can I have bill?

〔Waiter brings a glass of beer〕　(㉑ : 330)

(7) Luis : I want to ask you about somethin'

NS〔teacher〕 : Yes, Luis, what is it?

Luis : I don't understand about urinals.

NS : What is it that you don't understand about them?

Luis : I don't understand what you're supposed to do with them.

(*ibid.*)

この対話では，学習者の Luis がＮＳから出された 'journals' についての課題を 'urinals' と誤まって解釈したことが，後になって明らかになる。

２．２．２　Socio-cultural Level の Misunderstanding

Speech act レベルの misunderstanding には２つのタイプが考えられる。即ち，次の例文(8), (9)にみられる様に，相手の発話の意味を誤解する場合（inappropriate interpretation）と不適切な speech act を用いる場合（inappropriate realization）とである。

(8) A : Here your meal sir.

B : Oh. Is the cook new here?

A : Cook long time working here sir.

B : This is not the proper way to serve a steak ! (⑫ : 419)

(9) Sales Clerk 1 : But Korean Airline won't endorse the ticket, I don't think.

Sales Clerk 2 : (looking directly at customer) You can call them and ask.

Customer : OK...would you do that please ? Would you phone them and ask ? (⑬ : 145)

会話に関する規則には，universal な側面が考えられる一方で，それぞれの文化，社会に固有な特徴も存在すると言えよう。例えば，会話の開始と終りに関する formula, turn-taking の方法，topic の選び方等の違いが異文化間コミュニケーションでは，重要な問題をひきおこす可能性も存在するのである。

(10) A : Well, I must go now. We must get together soon.

B : All right, when ?

A : Oh...I'll call you.

B : When will you call me ? (⑫ : 423)

(11) Office boy : Where shall I put these books please ?

Addressee : Put them on the table.

Office boy : (some minutes later) I'll be making a move now. (⑬ : 149)

Cultural assumptions とは，ある context において最も適切な言語・非言語行動とは何かを規定している文化的な価値規準のことである。一例を挙げると compliment を英語でどの様に表現するかという問題は speech act に関係し，compliment に対して如何に応答すべきかとか，あるいは，どの様な場面で compliment を表現すべきかといった点は cultural assumption に関わるのである。

(12) Husband : Do you know where today's paper is ?

Wife : I'*ll* get it for you.

Husband : That's OK. Just tell me where it is. I'*ll* get it.

Wife : No, I'll get it. (③ : 135)

(13) Guest : These are delicious.

Host : Yes they are delicious.

Guest : It must have taken hours to prepare.

Host : Oh, yes. (⑯ : 190−191)

(14) Guest : Thank you for the wonderful meal.

Host : What ? Those little nothings ? (*ibid.*)

3. Misunderstanding の重要度

異文化間コミュニケーションにおける misunderstanding の研究から，教室内での具体的な指導，教材開発等への示唆を得るためには，misunderstanding の記述，原因分析に加えて，その重要度，即ち，個々の misunderstanding がどの程度コミュニケーションを阻害するかといった点も考察しなければならない。

3. 1 Negotiation of meaning の有無

まず第一に，misunderstanding が生じたことに対話者が気づくか否かによって，また，気づいた場合には，その misunderstanding を解決しようと試みるか否かによって，重要度も変化すると思われる。別言すれば，negotiation of meaning が行われなければ，misunderstanding

は解決される可能性はないのであるから，異文化間のコミュニケーションも阻害されることになるのである。この点に関して Varonis and Gass は次の様に述べている。

> The most conversationally "dangerous" situation arises when interlocutors lack shared background, linguistic system and specific beliefs, yet do not seek to negotiate meaning. When one interlocutor confidently interprets another's utterance, it is likely that participants will run into immediate problems because they do not share a common discourse space. These problems may take the form of mistaken attributions of social and / or psychological features such as character, attitude, intelligence, personality, politeness and common sence. (㉑ : 341)

一方，対話者が情報のずれ，あるいは不明確な部分に気づき，その問題を修復しょうとすれば，最終的には問題の解決に到達し得なくても，misunderstanding が文化的な stereotype や ethnocentrism にはつながらず，従って異文化理解は促進されると思われる。また，この様な negotiation of meaning は，第二言語習得に不可欠な comprehensible input を学習者に提供する働きもあるとする指摘もあり（⑳ : 85），misunderstanding も，negotiation of meaning を伴なえば，言語習得を促進する１つの要因とみなしうるのではなかろうか。

3．2　Sociocultural ＞ Linguistic？

ＮＳ／ＮＮＳ間のコミュニケーションに限定すると，linguistic レベルでの misunderstanding は，ＮＳによって容易に把握され，従って negotiation of meaning が行われる可能性も高いのに対し，sociocultural な要因に基づく misunderstanding は認識することさえ困難であり，さらには，相手に対する偏見を生む危険性も存在すると思われる。それ故，一般論としては，sociocultural な要因に基づく misunderstanding の方がより重大であると言えよう[4]。

しかしながら，sociocultural misunderstanding の方が linguistic misunderstanding よりも異文化理解への影響度が常に大きいとは言い難い。例えば，Gumperz は，次の様なイントネーションの違いによる misunderstanding の例を報告している。

> In a staff cafeteria at a major British airport, newly hired Indian and Pakistani women were perceived as surly and uncooperative by their supervisor as well as by the cargo handlers whom they served. Observation revealed that while relatively few words were exchanged, the intonation and manner in which these words were pronounced were interpreted negatively. For example, when a cargo handler who had chosen meat was asked whether he wanted gravy, a British assistant would say 'Gravy ?' using rising intonation. The Indian assistants, on the other hand, would say the word using falling intonation: 'Gravy.' (③ : 173)

3．3　Learner's Personality との関連

error analysis では，error の重要度を決定する上で，その出現頻度，理解度，容認度，さらには不快度等が考察されるが，異文化間コミュニケーション上の misunderstanding の重要度を決める上でも，こうした側面は分析の視点として含まれる必要があろう。また，sociocultural な要因に起因する misunderstanding に関しては，ＮＳの不快度のみならず学習者の不快度，あるいは，心理的側面をも分析しなければならない。例えば，ＮＳの視点からすれば日本人学習者の曖昧な表現は許容し難いものと言えようが，学習者にとっては，直截に表現することには心理的な抵抗が伴うと考えられる。Littlewood は，こうした学習者の personality に関わる要因と目標言語の norms との関係について次の様に述べている。

> . . . there is clearly a wide range of permissible behaviour, even among native speakers.

Within this range, individual speakers can make choices which reflect their own personality or behavioural style. In other words we are not dealing with set patterns of behaviour which can be passed on as 'norms' to foreign language learners. If we did this, we would be denying learners the important freedom which native speakers possess: the freedom to adapt aspects of their communicative performance to express their own personality and behavioural style. (⑤: 202)

4. 今後の課題

英語教育の視点からの異文化間コミュニケーション研究は，その端緒についたばかりであり，その研究領域，方法等を具体化する上で残された課題は多いと言える。

まず第一に，misunderstanding の具体例をどの様に把握するかといったデータ収集に関する問題がある。misunderstanding は予測することが不可能と思われるので，natural な会話を多く集めたとしても，データの中に分析すべき問題が含まれているという保障はない。従って，ある程度人為的な context の中でのデータ収集の方法を検討すべきであろう。

次に，具体的なデータを集めた段階での問題として，如何にして misunderstanding の存在を見極めるかといった点が挙げられる。特に，sociocultural な要因に基づいた misunderstanding は一般に把握しにくく，前述した様に，negotiation を伴わない，言わば，'covert misunderstanding' になると，その見極めは，ほとんど不可能と思われる。こうした問題の解決策としては，第一に discourse レベルでの分析を試みること，第二に対話者に対しての事後面接を行うこと等が考えられる。

最後に，misunderstanding の研究と具体的な英語の教授・学習との関連についても今後更に考察しなければならない。

〔注〕

1） 本研究では，異文化間コミュニケーションをＮＳ／ＮＮＳ間の英語によるコミュニケーションに限定する。

2） Varonis and Gass (1985)[*] 以外には，例えば Schmidt and Richards が Clyne の 'communication breakdown' (Where an intention is misunderstood) と 'communication conflict' (Where a misunderstanding leads to friction between speakers) といった区別を挙げている。(⑬: 141)

3） この点に関して Thomas は次の様に述べている。

. . . pragmatic description has not yet reached the level of precision which grammar has attained in describing linguistic competence. Secondly, pragmatics—language in use—is a delicate area and it is not immediately obvious how it can be 'taught.' (⑰: 97)

4） その１つの理由としては，次の点が考えられる。

. . . If a non-native speaker appears to speak fluently (i. e. is grammatically competent), a native speaker is likely to attribute his / her apparent impoliteness or unfriendliness, not to any linguistic deficiency, but to boorishness or ill-will. While grammatical error may reveal a speaker to be less than proficient language-user, pragmatic failure reflects badly on him / her as a *person*. (⑰: 96−97)

〔引用・参考文献〕

① Cohen, A. D. and E. Olshtain (1981), "Developing a Measure of Socio-cultural Competence: the Case of Apology," *LL*, 31, 1, 113−134.

② Grice, H. P. (1975), "Logic and Conversation,"in Cole, P. & J. L. Morgan(eds.) *Syntax and Semantics*, Vol. 3 : Speech Acts. N. Y. : Academic Press. (41−58)

③ Gumperz,J. J. (1982) *Discourse Strategies*. C. U. P.

④ Leech,G. N. (1983) *Principles of Pragmatics*. Longman.

⑤ Littlewood,W. T. (1983), "Contrastive Pragmatics and the Foreign Language Learner's Personality," *AL*, 4, 3, 200−206.

⑥ Long, M. H. (1983), "Native-speaker / Non-native Speaker Conversation and the Negotiation of Comprehensible Input," *AL* 4, 2, 126−141.

⑦ 直塚玲子 (1980) 『欧米人が沈黙するとき－異文化間コミュニケーション－』大修館書店

⑧ J. Vネウストプニー (1982) 『外国人とのコミュニケーション』岩波新書

⑨ Olshtain, E. (1983), "Sociocultural Competence and Language Transfer : the Case of Apology," in Gass, S. & L. Selinkerr (eds.) *Language Transfer in Language Learning*. Rowley, MA. : Newbury House Publishers, Inc. (232−249)

⑩ _____ and S. Blum-Kulka (1985), "Crosscultural Pragmatics and the Testing of Communicative Competence," *Lang. Testing* 2, 1, 16−30.

⑪ 小篠敏明 (編) (1983) 『英語の語答分析』大修館書店

⑫ Richards,J. C. (1980), "Conversation," *TESOL Q.*,14, 4, 413−432.

⑬ Schmidt,R. W. and J. C. Richards, (1980), "Speech Acts and Second Language Learning," *AL*, 1, 2, 129−157.

⑭ Smith,L. E. (ed.) (1983) *Readings in English as an International Language*.Oxford : Pergamon Press.

⑮ Tannen, D. (1982), "Ethnic Style in Male-Female Conversation," in J. J. Gumperz (ed.) *Language and Social Indentity*. C. U. P.

⑯ _____ (1984), "The Pragmatics of Cross-Cultural Communication," *AL*, 5, 3, 189−195.

⑰ Thomas,J. (1983), "Cross-cultural Pragmatic Failure," *AL*, 4, 2, 91−112.

⑱ Tsuido,K (in press) "Theoretical Considerations on Teaching Culture in TEFL in Japan," 垣田直巳先生御退官記念『英語教育学研究』大修館書店

⑲ 津田幸男 (1982) 『沈黙を破る英語』語研

⑳ Varonis, M. E. and S. Gass (1985)[a], "Non-Native / Non-Native Conversations : A Model for Negotiation of Meaning," *AL*, 6, 1, 71−90.

㉑ _____ (1985)[b], "Miscommunication in Native / Non-Native Conversation," *Lang. Soc.* 14,327−343.

㉒ Wolfson, N. and E. Judd (eds.) (1983) *Sociolinguistics and Language Acquisition*. New Newbury Hous Publishers, Inc.